

学術会議「D.ナツァグドルジ研究の当面する問題」

ゴンボスレンギーン・ガルバヤル
(モンゴル国立大学総合科学部文学芸術研究科教授)

学術会議「D.ナツァグドルジ研究の当面する問題」が、偉大な作家 D.ナツァグドルジ (1906-1937) の生誕 119 周年を記念し、誕生日の 2025 年 11 月 17 日の 14 時から 18 時まで、モンゴル国立大学本館の学術ホールで開催された。本会議は日本モンゴル文学会とモンゴル国立大学総合科学部文学芸術研究科が共同で組織し開催した。会議の招待状とプログラムは以下の通りである。〔図表省略〕

学術会議「D.ナツァグドルジ研究の当面する問題」には、モンゴル国立大学総合科学部長の B.ボルドエルデネ教授、同大学総合科学部文学芸術研究科の教員の方がた、日本モンゴル文学会会長で東京外国語大学の岡田和行名誉教授、同文学会副会長の S.バイガルサイハン教授、同文学会事務局長で北海学園大学のテレングト・アイトル名誉教授、同文学会会員で桜美林大学の都馬バイカル教授、そしてモンゴル国国民栄誉作家の J.サロールボヤン氏、モンゴル国文化功労者の Ch.ダグワドルジ教授、モンゴル国文化功労者の D.ツェンドジャブ博士、モンゴル国文化功労者の D.〔ダンザンギーン・〕ニャマー氏、モンゴル国文化功労者の O.ソンドイ氏などの作家の方がた、モンゴル作家同盟運営評議会議長でモンゴル国文化功労者の B.イチンホルロー女史をはじめとするモンゴル作家同盟の執行部の方がた、モンゴル科学アカデミー言語文学研究所文学研究部門長の D.ツェヴェェンドルジ博士、G.ビルグデーイ教授、D.ボロルマー研究員などの学者の方がた、モンゴル国立教育大学文学研究室長の B.ムンフナラン博士らの教員の方がた、モンゴル国科学功労者の J.バトイレードゥイ教授、モンゴル国文化功労者で翻訳家の Ya.ガンバートル氏などの言語文学関係の学者や研究者の方がた、そして文学研究に従事する大学院博士課程・修士課程の院生や学生たちが参加した。

本会議では、プログラムにしたがって、モンゴル国立大学総合科学部文学芸術研究科教授の G.ガルバヤルが総合司会を担当し、同大学総合科学部文学芸術研究科の B.ヒシグスフ教授が以下の開会の辞を述べた。

「みなさまの平安をお祈りし、ごあいさつ申し上げます。

モンゴルの新時代の文学の創始者の一人であり、天才的な作家でもあったダシドルジン・ナツァグドルジの生誕 119 周年にあたり、みなさまにお祝いのごあいさつを申し上げます。日本モンゴル文学会はこれまで、モンゴル国立大学総合科学部人文科学系文学芸術研究科と共同で『モンゴル文学研究』に関するいくつかの会議を開催してきました。これらの会議はその使命を果たしてきました。本日、これらの会議の伝統にしたがい、偉大な作家 D.ナツァグドルジの誕生日を記念し、『D.ナツァグドルジ研究の当面する問題』と題

する学術会議を正式に開催します。来年はD.ナツァグドルジ生誕 120 周年を迎えることとなります。本日の会議が、D.ナツァグドルジ研究の当面する諸問題を一定程度解決し、残されたいくつかの未解決の問題は来年の記念会議で提起するために開催されることを嬉しく思います。

本会議の活動のご成功をお祈りいたします。」

会議の冒頭では、プログラムにしたがい、日本モンゴル文学会会長で東京外国語大学の岡田和行名誉教授が以下のあいさつを述べた。

「みなさまに本日のごあいさつを申し上げます。日本モンゴル文学会会長の岡田です。

本日、偉大な作家ダシドルジーン・ナツァグドルジの誕生日を記念し、日本モンゴル文学会とモンゴル国立大学総合科学部人文科学系文学芸術研究科が共催する『D.ナツァグドルジ研究の当面する問題』と題する学術会議にご出席のみなさまに、日本モンゴル文学会を代表してごあいさつ申し上げます。日本モンゴル文学会が 50 年以上前に設立され、設立当初からモンゴル文学を研究調査し、モンゴル文学を日本の読者へ提供紹介する活動を定期的に行ってきた組織であるということをご存知のない方がたにお伝えできるのを嬉しく思います。

1906 年 11 月 17 日に生まれた D.ナツァグドルジの生誕 60 周年記念を 1966 年にモンゴル全土で祝った後、1976 年、1986 年、1996 年、2006 年、2016 年と 10 年ごとに盛大に祝ってきた歴史があります。来年 2026 年には生誕 120 周年を記念し、大規模な行事が組織されることでしょう。したがって、本日のこの会議は生誕 119 周年を記念し、さらに来年の生誕 120 周年を前もって祝福する慶事であると理解することもできるでしょう。

今から 50 年以上前の 1971 年、国家賞受賞者で国民栄誉作家のセンギーン・エルデネ氏は、『D.ナツァグドルジの短編小説に関する研究はきわめて貧弱なように思われる』と遺憾の意を表明していました。しかし、D.ナツァグドルジ賞受賞者の Ch.ジャチン教授が 2018 年に編集出版した『ナツァグドルジ研究の念珠』〔Ч.Жачин, *Нацагдорж судлалын эрх, Тэргүүн дэвтэр, Редактор Ч.Жачин, Гурван-Эрдэнэ Багшийн дээд сургууль, “АРБАЙБАРХАН” ХХК, Улаанбаатар, 2018, 504 х.*〕という著書を参照すると、『D.ナツァグドルジ研究』は過去 50 年間で大きな発展を遂げ、今後とも進歩を続けることはまちがいないでしょう。

では最後に、偉大な作家の生誕を記念して開催される『D.ナツァグドルジ研究の当面する問題』と題する学術会議の活動と、研究発表される学者や先生方のみなさまのご成功をお祈りいたします。ご清聴ありがとうございました。」

引き続き、モンゴル国立大学総合科学部長の B.ボルドエルデネ教授が以下のあいさつを述べた。

「親愛なる学者のみなさま、みなさまの本日の平安をお祈りいたします！

モンゴル国立大学は、社会の多様な分野における教育と研究を行う、モンゴル国で最も古い大学です。社会精神の主要な表現である文学の研究と教育は、本校の文学芸術研究科

の先輩教員であった Ts.ダムディンスレン先生、B.リンチェン先生、Sh.ガーデンバ先生、S.ロブサンワンダン先生、J.バドラー先生、D.ツェデブ先生、Ch.ダグワドルジ先生、S.ドラム先生、Ch.ビリグサイハン先生、D.ガルバータル先生をはじめとする、何世代にもわたる啓蒙家、芸術家、学者によって行われてきました。そして今もなお、彼らの教え子たちが教育と研究を続けています。

本校の文学芸術研究科が、日本モンゴル文学会のみなさんと共同で、偉大な作家 D.ナツァグドルジの誕生日を記念し、『D.ナツァグドルジ研究の当面する問題』と題した研究会議を開催し、二十世紀モンゴルの偉大な文人であり、新時代のモンゴル文学の創始者の一人であった D.ナツァグドルジの伝記と芸術作品を多面的に研究し議論していることに対して、感謝と支持を表明いたします。

『D.ナツァグドルジ研究の当面する問題』をテーマとした学術会議が、その目的を達成し、偉大な作家 D.ナツァグドルジの研究において具体的な進展が遂げられ、学者や研究者の方がたの研究が賢明なるものになると確信しています。今後ともモンゴル文学を代表する著名な作家たちの伝記や芸術作品を研究する会議が継続され、日本モンゴル文学会の学者や研究者のみなさんと共同で多くの会議が開催されると信じています。

会議の活動のご成功をお祈り申し上げます。」

最初の発表は、モンゴル国科学功労者で文献学博士 (Sc. D) の S.バイガルサイハン教授の「D.ナツァグドルジ研究の当面する問題」で、要旨は以下の通りである。

D.ナツァグドルジ研究がいかんして生まれ、生まれた時からどのように発展してきたのかを、10-20年ごとの時系列にそって発表した。このような時代区分の時系列の反復過程で、D.ナツァグドルジ研究がどのように発展し、当面する諸問題をどのように解決してきたのかを、各時代の D.ナツァグドルジ研究者 (B.ソドノム、B.リンチェン、S.ロブサンワンダン、D.ツェデブ、Ch.ジャチンなど) の研究に基づいて解説した。発表者の観察によれば、時代が経過するにつれて、D.ナツァグドルジ研究の多くの問題が科学的な根拠に基づいて解決されてきたが、より複雑で困難な諸問題がその都度発生し続けてきた。言いかえれば、D.ナツァグドルジ研究で解決すべき諸問題を各時代の D.ナツァグドルジ研究者たちは解決してきたが、それらの解決によってより困難な状況に直面し、さらなる研究調査が必要な諸問題が生じ続けてきたのである。このことは、現時点から見れば、D.ナツァグドルジ研究には研究調査すべき当面する問題が多数存在したが、その一方で、それらを研究調査し解決すればするほど、次つぎと当面する新しい問題が生じ続けてきたことを意味する。ここに D.ナツァグドルジの思想と詩学の持つ驚嘆すべき魅力があるのだと発表者は述べる。またその一方で、D.ナツァグドルジ研究の歴史的な発展と変化、成果と誤謬の概要を明らかにし、今後の D.ナツァグドルジ研究が当面する諸問題を提起した。その中でも、D.ナツァグドルジ研究者の D.ツェデブ教授の研究成果を、彼が著した D.ナツァグドルジ研究に関連する論文や、テキスト研究を行って編集出版した D.ナツァグドルジの『全集』

(1996年、2006年、2016年)に準拠して詳細に述べた。

次の発表は、日本モンゴル文学会会長で東京外国語大学の岡田和行名誉教授の「D.ナツァグドルジの短編小説『お坊さまの涙』の人間像の問題を再び取り上げる」で、要旨は以下の通りである。

発表者は、D.ナツァグドルジの短編小説「お坊さまの涙」をめぐる研究者や読者の間に巻き起こった論争を整理・研究し、「D.ナツァグドルジの短編小説『お坊さまの涙』のロドン人間像についてはさまざまな解釈が提示されてきた。このことは、この作品の持つ永遠の生命力の秘密と、矛盾に満ちた結論へと導く不思議な魅力を表している。ロドン人間像が悲劇的か喜劇的かについて、読者や研究者の意見が現在でも一致していないのは事実であるが、私自身は以下のように考えている。すなわち、

1. この短編小説を人間ロドンの〔普遍的な〕「愛」の物語とするならば、悲劇的な作品となる。
2. この短編小説を僧侶ロドンの「好色」物語とするならば、喜劇的・風刺的な作品となる。
3. この短編小説を作家S.エルデネのように、玉白華(ツェレンルハム)の「肉欲」と「狡猾」の物語とするならば、退廃的な封建社会を痛烈に批判した作品となる」と述べている。

このような結論にいたった発表は、すでに1997年8月にウランバートルで開催された第7回国際モンゴル学者会議の第3部会「モンゴルの文学・文化・芸術」で「D.ナツァグドルジの短編小説『お坊さまの涙』のロドン人間像の問題について」という題目で行われ、その発表論文も2002年に国際モンゴル学会(IAMS)の叢書『モンゴリカ』(第12(33)巻)に掲載されたが、その後I.ジャブフランなどの研究者の研究[И.Жавхлан, “Д.Нацагдоржийн “Ламбугайн нулимс” зохиолын зөрчлийн асуудал”, *Эрдэм шинжилгээний бичиг* (МУИС-ийн Шинжлэх Ухааны Сургууль), Боть XXXIX (433), Улаанбаатар, 2015, х.101-107.]が発表され、D.ナツァグドルジの短編小説「お坊さまの涙」について自説をあらためて詳細に解説する必要が生じたため、本発表でD.ナツァグドルジのこの短編小説に関する自身の見解を新たに詳細に述べたのである。

三番目の発表は、モンゴル国功労教員のCh.ジャチン教授の「D.ナツァグドルジの作品の手稿における語の変換と選択した修正について」で、要旨は以下の通りである。

D.ナツァグドルジが自身の作品を入念に構想し、厳密に執筆していたことは、彼の手稿からはっきりと見て取れる。その理由は自身の書いたものを何度も修正していたからである。これらの修正は、第一に、自身の作品をさらに改良する目的で行われ、第二には、おそらく、当時の同僚に自身の書いたものについて探りを入れるような質問をしながら、イデオロギー的かつ政治的な観点から行われていたと推測できる。もちろん誰もが自身の作品をさらに改良する目的で修正をすることであろう。それは自身の作品を改良するために

何度も読み返し推敲して完成度を高めていたことを表している。だが別の一部の修正は〔黒く〕塗りつぶされ、完全に削除されている。このような修正は、私たちの見方によれば、政治的・イデオロギー的な理由から行われたのであろうと推測できると述べ、このような二種類の修正をどのように研究してきたのかという自身の経験と、このような自身の研究過程で遭遇した正否を、「有翼の駿馬」、「黒い岩」、「お坊さまの涙」などの短編小説や「四季」、「出版」などの詩の手稿に基づいて詳述した。

四番目の発表は、モンゴル国立教育大学の R.チュルテムスレン顧問教授の「D.ナツァグドルジに関するオーラル・ヒストリー（口述歴史）を解明し研究する」で、要旨は以下の通りである。

発表者は、D.ナツァグドルジ研究において、彼に関するオーラル・ヒストリーや情報資料が重要な位置を占めていることを明らかにし、自身の恩師だったモンゴル国立教育大学の D.ダシドルジ先生が取材・収集して残された D.ナツァグドルジに関する情報資料や史資料を紹介し、それらの口述資料をこれまでどのように研究調査し、D.ナツァグドルジ研究に貢献してきたのかについて述べた。発表者の発表によれば、D.ダシドルジ先生が、作家 D.ナツァグドルジを知る、共に働いていた B.リンチェンをはじめとする多くの人びとに質問し書き取った情報資料の一部があるという。また別の一部資料は、D.ナツァグドルジの知人であったり、親交を結んでいたりした人がいれば、その故郷にまで出かけて、彼を知っている人びとに彼について語ってもらい書き取った口述資料であるという。これらの興味深い口述資料は、D.ダシドルジ先生が生前お元気な内に出版されたり研究されたりしたものもあったが、研究や出版が果たせずに残された資料は発表者が遺産として継承したという。発表者は、D.ダシドルジ先生が残された口述資料を、D.ナツァグドルジ研究に関連する学会などで連続的に発表し、多くの人びとと共有していることについても、口述資料に基づいて発表した。

五番目の発表は、日本の桜美林大学の都馬バイカル教授の「サイチンガとモンゴル国の作家たちとの関係を探る」で、要旨は以下の通りである。

サイチンガは内モンゴル近代文学の創始者の一人であると述べ、彼の芸術創作に日本留学とモンゴル留学が深遠な影響を与えたことをめぐって発表した。サイチンガは日本に留学したことによって、芸術や文学についての理論的知識を獲得し、世界の古典文学の経験と成果を学んだ。その一方で、モンゴルに留学し労働と生活を経験したことによって、伝統的なモンゴルの文化と思想を深く学び、モンゴル人作家たちの作品、創作経験、詩学からも良く学んだと紹介した。モンゴルの作家たちを通じて、D.ナツァグドルジの「わが故郷」をはじめとする作品やその芸術的な創作方法の深い影響を受けたことを、二人の作家の詩作品〔D.ナツァグドルジの「わが故郷（Миний нутаг）」とサイチンガの「沙原・我が故郷（Элс манхны эх нутаг）」〕のいくつかの行や連に依拠しながら分析を行ったことを発

表した。

最初の五つの発表後、モンゴル国国民栄誉教員の L.ダシニヤム教授、モンゴル国文化功労者で作家・ジャーナリストの B.ガラーリド氏、作家の G.バトジャルガル氏らが、D.ナツァグドルジの評伝研究や本会議の発表に関連して論評した。

学術作家 L.ダシニヤム氏は、「本日、偉大な作家 D.ナツァグドルジの生涯と作品における当面する問題について、専門の学者や研究者が会議を開催し、偉大な作家の作品をめぐって、複雑な研究や議論が交わされているのを感謝の念をもって拝見しています。私自身にとって D.ナツァグドルジの娘アーナンダは良き知人でした。彼女がモンゴル国の公民になる時、さらにはモンゴル国の公民となってウランバートル市で生活している時に何度もお会いし、彼女自身および彼女の両親について詳しくお話ししました。ナツァグドルジーン・アーナンダについて、彼女の書いた詩の作品を収録して出版した『天真爛漫な人びと』

〔Нацагдоржийн Ананда-Шри, “Хонгорхон хүмүүс”, Эрхэлсэн дэд доктор Л.Дашням, Монгол Мэдлэгийн Их Сургууль, “Монгол оюун” сан, Улаанбаатар, 1997, 140 х.〕という本をみなさんは読んだことがあるでしょう。どうしてこのようなお話しをしているのかと言えば、今後 D.ナツァグドルジ研究に関連して、彼の娘の生涯、信条、詩作品も重ねて研究していただければ良いと思っているからです。その一方で、〔本会議の〕四〔五?〕名の学者の発表はすべて新しい研究で、問題提起をした興味深い発表でした。その中でも、先ほど発表した日本の研究者の都馬バイカル氏の発表には大いに興味を引かれました。その理由は、内モンゴルの偉大な作家サイチンガがモンゴル人作家たちとどのような関係を結んでいたのか、その中でも、D.ナツァグドルジの作品からサイチンガがどのように伝統を受容し、自身の創作方法を刷新し執筆していたのかを研究し明らかにした点がすばらしいと思われたからです。来年には私たちの偉大な作家の生誕 120 周年が訪れます。この記念すべき行事を翌年に控え、問題を提起した本会議の活動のご成功をお祈りいたします」と述べた。

作家・ジャーナリストの B.ガラーリド氏は、「本日、偉大な作家の誕生日を迎え、モンゴル国立大学のこのホールに多数の作家、文学研究者、読者が集い、偉大な作家の作品と生涯について新しい研究が紹介され、それらの研究をめぐって議論が交わされているのを嬉しく思います。D.ナツァグドルジ研究は時代を経るにつれてさらに明確化され、その研究対象もさらに多様になっているようです。このことは D.ナツァグドルジの光輝に満ちた才能の反映なのでしょう。先ほどの四〔五?〕本の発表は新しく興味深いものでした。都馬バイカル先生が、内モンゴルの偉大な作家サイチンガの作品と思想がモンゴルの作家たち、その中でも D.ナツァグドルジの芸術作品とどのように関係しているのかを詳細に研究され発表されましたが、私は先生の発表を歓迎し支持します。それでは本会議の活動のご成功をお祈りいたします」と短評を述べた。

作家の G.バトジャルガル氏は、「興味深いすばらしい発表を拝聴し感謝いたします。私

は作家です。最近、一冊の長編小説を書いて出版しました。その小説が D.ナツァグドルジ氏と関係する作品だと申し上げるためにお話しをさせていただきます。なぜなら、私のある知人のお姉さんが作家の D.ナツァグドルジと親しく交際し、さらには同棲することまで合意していましたが、結局いっしょに暮らすことにはならなかったそうです。その人は D.ナツァグドルジについて多くの興味深い逸話を語る方で、私は自分の小説にそれらを反映させました。D.ナツァグドルジに関係するそれらの興味深い逸話は私の小説で読むことができますことをみなさまにお知らせします。どうもありがとうございました」と述べた。

六番目の発表は、モンゴル国立大学総合科学部文学芸術研究科の B.ヒグスフ准教授の「D.ナツァグドルジの散文作品におけるモンゴル人の思想の価値」で、要旨は以下の通りである。

モンゴル人の思想の価値を、そして遊牧民の思想の特徴、遊牧民の生活様式の特徴、遊牧民の社会制度の特徴、遊牧民の芸術と美学の特徴を、D.ナツァグドルジの「有翼の駿馬」、「大草原の美」、「白い月と黒い涙」などの短編小説や戯曲「悲しみの三つの丘」を代表例として取り上げて解説し発表した。また戯曲「悲しみの三つの丘」のホルルマーの人間像の芸術的な造形に現れた成果を、社会と時代—個人と信条—人間の愛情という関係の中で取り上げて見た。

最後の発表は、モンゴル国立大学総合科学部文学芸術研究科の A.ムンフオルギル准教授の「D.ナツァグドルジの短編小説『お坊さまの涙』と S.エルデネの短編小説『家畜の脚の土ぼこり』における表現と思想の伝統」で、要旨は以下の通りである。

D.ナツァグドルジの短編小説「お坊さまの涙」の表現、思想、詩学の伝統が、近代文学の、例えば短編小説のジャンルでどのように豊かになってきたのかを、具体的な例を取り上げて見ることをめざした。両極性を持つ二つのを対峙させ、必然的な矛盾へと導く芸術の対照方法によって、一方が他方によって開示され、その本質がより深く表現されることがある。こうして読者にはさらに熟考するための開かれた可能性が提供されるのである。例えば、短編小説の表現、思想、芸術手法の伝統が、1960年代の短編小説のジャンル刷新の代表者である S.エルデネの短編小説「家畜の脚の土ぼこり」に、どのような興味深い形で現出しているのかについて、主人公の人間像を対照した表現からはっきりと見て取れる。現実生活における法理と摂理を 1920-1930 年代の僧侶ロドンに漢人商人街に住むユイ・バイ・ホア（玉白華）が経験させ理解させてやったが、その一方で、1960年代の純朴な牧民の女チャンツァルに家畜を追う通りすがりの牧民の男バルバルが〔現実生活における法理と摂理を〕語ってやるのである。このように語って理解させてやるために、彼らのような当時の社会の典型的な人間像の思想を創作したのが正しい選択であったことについて、この二つの短編小説を比較分析し解説した点が本発表の特徴となっている。

以上の発表について、会議参加者と発表者の質疑応答が行われた。モンゴル国文化功労者の D.ツェンドジャブ博士は、「会議はすばらしかったです。発表は興味深く新鮮でした。私個人としては、意見が三つありますので、簡単に述べます。第一に、D.ナツァグドルジの作品や著作もかなり出版され議論もされています。今後は D.ナツァグドルジ研究に関する著作全集を出版したいものです。このことにみなさん留意してください。第二に、D.ナツァグドルジ研究に関連して今後次つぎと開催される会議には新しい若い研究者たちを参加させましょう。言い換えれば、D.ナツァグドルジ研究の次世代の隊列を育成するのが正しいのではないのでしょうか。第三に、D.ナツァグドルジの生涯の晩年とその心理について、短編小説『黒い岩』と関連づけて研究すれば、新しい研究になるのではないかとの意見を若手研究者のみなさんにお知らせしておきます。ありがとうございました」と述べた。次に J.バトイレードゥイ教授が、科学アカデミー言語文学研究所長の O.シネバヤル博士をはじめとする研究者たちから D.ナツァグドルジ賞を受賞した岡田先生に贈られた〔言語文学研究所出版の〕主要著書を手交して祝意を表した。J.バトイレードゥイ教授はさらに「私はドイツに仕事で滞在している時に、D.ナツァグドルジの伝記に関連する新しい資料を発見しました。本会議のプログラムが発表された後に会議の情報を知りましたので、その新資料について本会議で発表することはできません。来年開催される偉大な作家の生誕 120 周年の会議で新しい情報を含んだ発表を計画していることをみなさんにお伝えいたします。成功裏に組織された本会議で発表された研究者のみなさんに感謝いたします」と述べた。またその一方で、Ya.ガンバータル教授は「興味深い良く組織された会議に出席できて嬉しく思います。私は D.ナツァグドルジ研究者ではありませんが、この偉大な作家に関しては 3, 4 編の論文を書いて出版したことがある人間です。D.ナツァグドルジはドイツに留学している時に、著名なモンゴル学者の E.ヘーニッシュ先生の下にいて先生を助けていました。その意味では、E.ヘーニッシュ先生の書庫から D.ナツァグドルジに関連する資料が今後発見されるかもしれません。またその一方で、D.ナツァグドルジは中国語もある程度学んでいて、その程度に応じて、中国の教養と思想も学んだ人物だと私は見えています。この観点からも今後研究する必要があるということを研究者のみなさんにお伝えしておきます」と述べた。次に、科学アカデミー言語文学研究所主任研究員の T.プレブスレン博士、モンゴル国立教育大学モンゴル言語学研究室教員の R.サランゲレル博士たちが D.ナツァグドルジの作品語彙辞典を作成していることについて述べ、D.ナツァグドルジ研究者の S.バイガルサイハン氏や Ch.ジャチン氏などの方がたに方法論上の助言を受けているところで会議は終了となった。

本会議は日本モンゴル文学会副会長の S.バイガルサイハン教授の閉会の辞をもって幕を閉じ、プログラム通りに 18 時に散会した。

(訳文責：岡田和行。〔 〕は訳者による注記あるいは補足である。)